

筆者の工夫を問いかけながら読む『大鏡』

—高校3年生「肝だめし」を例に—

金子 萌

1. はじめに

高等学校における古典学習は、重要語句や文法事項等の古典読解のための知識の習得、テキスト内容の正確な理解が主たる目標とされることがあり、そこには必ずしも主体的な学びの場が保障されているとは言えない。しかし、学習者の言葉の力の深化・拡充を目標とする国語科授業では、古典学習においてもテキストに主体的に関わる読者の育成が目指されるべきである。

そこで本実践では、学習者がテキストに主体的に関わる方法として、説明的文章学習で用いられている「筆者の工夫を評価すること^(注1)」を古典学習に取り入れることを試みた。書き手の言語使用を批評することを学習の中心に位置づけることで、知識の習得を含めた内容理解とその先にあるテキストとの対話ができるのではないかと考えた。題材とした『大鏡』には、道長の栄華を賞賛するという書き手の執筆意図が表現や構成に顕著に表れている^(注2)ため、書き手の言語使用（レトリック）を批評することに適した教材である。何らかの意図に基づく書き手の言語使用とは、説明的文章の学習・指導における「筆者の工夫」に通ずるものがあると考えた。そこで、説明的文章における「筆者の工夫を評価する」という読みの方法を援用し、『大鏡』における「書き手の工夫」を学習者に問いかけることとした。

2. 『大鏡』における評価読み^(注3)の可能性

読み手である学習者がテキストを評価・吟味することは、説明的文章の学習・指導においてすでに多くの提言がなされている。評価読み・吟味読みでは、読み手は、目の前にある文章に書かれていることを書かれているとおりに受け取るのではなく、書き手である筆者の書きぶりを評価する。その過程には、テキストや書き手と対話しながら読みを深めていくという主体的な読みが行われることとなる。書き手の表現や構成の良さを「筆者の工夫」であるとし、書き手の表現意図に気づかせることの学習効果については、国語科教育研究において数多くの議論が行われている。筆者もこのような読みの方法に基づく学習を行いたいという立場のもと、実践を重ねてきた。そして、そのような書き手の表現意図を考えながらテキストに向き合うという読みのスタンスそのものは、文学的文章を読む際においても行われるも

(24)

のであり、「筆者の工夫」を問う読みは、現代文の学習に限らず、古典学習においても行うことが可能であると考えた。

特に、実在の人物の行動を描く歴史物語においては、語り手である表現者の意図が明確に表れており、本実践で扱う『大鏡』はそれがより顕著であることから、説明的文章を持つ「説得の論理」^(注4)に通ずるものがある。説明的文章は、筆者の持つ「主張」とそれを支える論理展開をよりわかりやすく提示し、読者を納得させようとする。同様に、『大鏡』も語り手の中に、より目立たせたい人物・出来事があり^(注5)、それを読み手に印象深く伝えようとしている。それゆえ読み手は、書き手の書きぶりを評価することで、書き手の印象づけたい人物・出来事をより鮮明に読み味わうことができる。また、書き手の意図を推論しながら読むことで、物語の構成や細部の表現にこだわりながら作品を読み進めることとなり、言葉そのものへの認識を深めることができる。

本実践の学習者は、前年度に『大鏡』の一部を学習していたため、『大鏡』の執筆意図である「道長の栄華を賞賛すること」を共通認識とし、それを踏まえて「書き手の書きぶりを評価すること」を主たる目標とすることとした。そのため、学習者には「道長を目立たせる工夫を見つけよう」と投げかけ、学習者自身が書き手のレトリックを見つけ出して意味づけることを学習の中心とした。

3. 実践の概要（高校3年生対象）

(1) 教材

「肝だめし」『大鏡』（『古典B 改訂版 古文編』大修館書店、平成29年検定済）

(2) 単元目標

- 表現や構成に着目しながら作品を読み、書き手の表現意図を推論し、自分の言葉で表現できる。
- 他者の分析内容を聞くことで作品分析の視点を広げ、自分の読みに活用できる。
- 言葉にこだわりながら作品を読むことで、古典そのものを深く読み味わう態度を養う。

(3) 単元計画（全7時間）

【第1次】1時間

- ① 前単元で学習した『和泉式部日記』の和泉式部、『蜻蛉日記』の藤原道綱の母はどのような人物であったかを考察する。
- ② 和泉式部や藤原道綱の母のイメージは、作品中で語られる「表現」により作り出されたものであると理解する。

【第2次】1時間

- ① 前年度学習教材「競べ弓」（『大鏡』）を再読し、道隆と伊周の人物像を考察する。
- ② 道隆と伊周の描かれ方とその表現意図、『大鏡』という作品における人物の位置づけを理解する。

【第3次】5時間

- ① 主教材「肝だめし」を読む。事前の予習や緻密な口語訳は行わず、音読や発問を通じて大まかに内容を捉える。
- ② 「道長を目立たせる工夫」を見つけ、〈作品分析シート〉になぜその表現が「工夫」であるのかを分析し記述する。
- ③ 他者の作品分析を聞き、より深く読むための着眼点を見つける。

4. 単元の実際**【第1次】第1時**

前単元では、日記物語である『和泉式部日記』『薫る香に』と『蜻蛉日記』『町の小路の女』を学習した。対称的な二人の女性の物語を読み、それぞれがどのような女性であると感じたかを記述した。学習者は、和泉式部＝魔性の女、男を自由自在に操っている、藤原道綱の母＝報われない人、男運がない、などと人物を評価した。

その上で、授業者から「でも、和泉式部が魔性の女で藤原道綱の母が男運がない人だ、となぜ言えるのか？」と問いかけた。学習者は、「そうとしか読みようがない。」「和泉式部は〇〇するのに、藤原道綱の母は△△する。」と答えた。それを聞き授業者から学習者に、「私たちはそう読むしかない。なぜなら彼女たちがそう語っているから。」と伝えることで、物語には語り手／書き手がいるという視点を持たせ、物語を読むことは、語り手の言葉を読むことであると示した。

【第2次】第2時

『大鏡』については、前年度（2年次）において「競べ弓」と「花山院の出家」の2教材を学習した。今回の学習の柱とする「道長を目立たせる工夫を見つける」ということを踏まえ、プレ学習として「競べ弓」の人物像を読み取る学習を行った。

「競べ弓」において、道長と対称的に描かれるのは道隆と伊周である。この二人がどのような人物であるか、そしてそれが読み取れるのはなぜかを記述・共有した。その上で「なぜ、彼らがこのような人物として描かれるのか」を問いかけ、『大鏡』＝「道長の栄華」であるという前提を共有した。そして、次時から扱う「肝だめし」は『大鏡』＝道長の物語だとい

(26)

う設定のもとで読み進め、作品のどこに道長の栄華を象徴する部分があるのかを探っていくことを単元の目標とすることを示した。

【第3次】第3時～第7時

本文を5つのパートに分け、音読、発問による内容理解を経て、個人による作品分析を行った。事前の予習を課すことはせず、全時間において初読での学習とした。学習内容は《資料》のワークシートに示すとおりである。なお、授業では毎時間黒板の中央にスクリーンを配置し本文や発問内容を示している。

終末時には、「作品分析シート」に「道長を目立たせる工夫」を記述し、提出させた。授業者は毎時間点検し、次時の授業開始時には本文と照らし合わせながら生徒の記述内容を紹介し、個々の分析内容の共有化を図った。

1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目	8時間目	9時間目	10時間目	11時間目	12時間目	13時間目	14時間目	15時間目	16時間目	17時間目	18時間目	19時間目	20時間目	21時間目	22時間目	23時間目	24時間目	25時間目	26時間目	27時間目	28時間目	29時間目	30時間目	31時間目	32時間目	33時間目	34時間目	35時間目	36時間目	37時間目	38時間目	39時間目	40時間目	41時間目	42時間目	43時間目	44時間目	45時間目	46時間目	47時間目	48時間目	49時間目	50時間目	51時間目	52時間目	53時間目	54時間目	55時間目	56時間目	57時間目	58時間目	59時間目	60時間目	61時間目	62時間目	63時間目	64時間目	65時間目	66時間目	67時間目	68時間目	69時間目	70時間目	71時間目	72時間目	73時間目	74時間目	75時間目	76時間目	77時間目	78時間目	79時間目	80時間目	81時間目	82時間目	83時間目	84時間目	85時間目	86時間目	87時間目	88時間目	89時間目	90時間目	91時間目	92時間目	93時間目	94時間目	95時間目	96時間目	97時間目	98時間目	99時間目	100時間目
------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------

5. 古典学習における批評読みの実際

5.1 作品分析の実際—第3時・第4時について—

第3時では、道長の発言内容そのものへの評価や、道長以外の人物への批判など、語られる内容そのものから考えるものが多かった。道長と道長以外の人物が、なぜここまで差をつけて書かれているか、人物に対する見方の違いがなぜ生じるのか、といった観点での分析をした者は少なかった。

ただし、少数ではあるが表現や構成に着目できていた者もいたため、第4時の授業開始時に学習者の分析内容を紹介しながら評価読みのバリエーションを示した。第4時では、「何が書かれているか」に加え、「どう書かれているか」に着目できる者が増えた。

1 時間目（第3時）肝だめし①作品分析シートの記述内容

【内容】

自分の息子は公任に及ばないと語る父、その父に何も言えない道兼と道隆を書くことで、公任を超えることを語る道長の強さが表れる。また、反論すらない兄との差を示している。／「影をば踏まで、面をやは踏まぬ。」…公任に及ぶかどうかではなく、公任をの面目を失わせること

を宣言している。より大きな野望を示している。／後半の公任と教通との関係エピソードで、道長の発言が現実化したと思わせる。

【表現／構成】 優れた公任の存在を先に書くことで、それを超える道長を目立たせることができる。／公任の優れた点を述べ、及ぶことが難しいという前提を作ることで、それでも超えていこうとする道長の強さを表現できる。／公任の良さは多く語らないことで、道長より上にはならないようにしている。／兄は二人まとめて書かれるが、道長だけは別で書かれている。／「影をば～」の前に、道長の「いと若くおはします」とあり、若い頃から堂々たる言い分だったと示す。／公任の後半エピソードの前に「まことに～」と語り手の語が挿入され、道長の「影をば～」の発言の現実化を補強している。

2 時間目（第 4 時）肝だめし②作品分析シートの記述内容

【内容】

冒頭部に、これから語られることへの語り手の見解が述べられており、道長の栄光を読者にも意識させることができる。／若い頃から強い人物であると語られている。／「神からの守りも強い道長」とすることで、これから起こることは神さえも認めると示している。／清涼殿には道長道兼道隆以外も何人かいることをあらかじめ示しておくことで、肝試しを断る者を複数出させることができる。（道長対大勢という構図ができる。）／悪天候で不気味な夜であるという誰も肝試しに行きたくない状況を作り出し、それでも行くと言う道長を目立たせる。／道長が応えた花山天皇の提案は、気味の悪い状況の中で肝試しを行うという無理難題であり、本来ならば応じることを拒否したくなる提案である。／道隆道兼は肝試しに否定的で、道長だけが積極的に参加を表明している。／人が大勢いる中でも道長は肝試しに賛成しており、失敗できない状況を自ら作り出している。／道長は兄に比べて重要度の高い「大極殿」へ行くことを命じられている。

【表現／構成】

冒頭部での語りとその後の行動を一致させている。／「おどろおどろしくかきたれ雨の降る夜」とし、道長が肝試しに行く状況の悪さを先に伝えることで、道長の『どこへでも』行く」という発言を目立たせる。／肝試しに行きたくない人々の後に道長が行くと発言することで、道長が目立つ。／肝試しを提案したのは花山天皇であり、道長だけが天皇の提案を受け入れ、他の者は断ったと読める。／道長以外の者の発言は「えまからじ」であり（「行かない」ではなく「行けない」と不可能表現を使っており）、道長との違いがよりはっきりする。／「えまからじ」と〈のみ〉発言されており、人々はそれしか言えない程肝試しに恐怖を感じている。／道長は「行きます」だけではなく、「いづくなりとも」が加えられており、決意の強さがある。／道長は、肝試しに対し即座に応答している（承諾の前の発言はない）ので、潔さが表れる。／人々が断り、道長が承諾することが続けて書かれていて、読み手は自然と両者を比較する。／語りの中で、道長のみが名前で語られており、道兼・道隆は語りの中に出てきていない。／道隆、道兼の直接的発言は書かれておらず、その場にいる他の人々と同列の扱いととれる。／花山天皇が肝試しの会場を指定する順序は、道長が一番最後であり、特別感がある。／強気の道長、道長以外は弱気であるという第 1 段落の構成を引き継いでいる。

5. 2 学習活動の詳細—第 5 時について—

ここでは、第 5 時「肝だめし」③における学習者の記述内容を分析・考察する。学習の流れを次頁に示す。

第4時までの「道長を目立たせる工夫」としては、道長の行動内容そのものへの言及が多く、道長以外の人物に目を向ける者や表現・構成といった書きぶりに着目できた者は少数であった。そこで、授業の始めと終わりに学習者の記述内容を紹介しながら、「作品分析の観点」を示し、「自分の読みの視点を広げる」ことができるようにした。なお、これらの観点は、説明的文章学習の「評価読みの観点^(注6)」を参考とし、構成した。また、本時のテキストが道長をとりまく人々の行動や心理が描かれる場面であることを踏まえ、授業時の発問は道長以外の人物に着目できるように構成した。

学習者に示した作品分析の観点	具体的な記述内容
なぜ、この発言・行動か？	・道長は、肝試しに「一人で行く」と宣言しており、より困難な状況を自ら作り出している。
なぜ、この順序・構成か？	・道隆と道兼が出てくる描写はほとんどが道長の言動の前後にあり、比較の対象とされている。
なぜ、この表現の仕方か？	・道兼道隆の出ていく様子が「苦む苦む」と表現されていて、道長の出で行き方との差が出ている。
語られないことは何か？	・道兼と道隆は発言もなく単独でも出ていないので、道長以外の「人々」に含まれてしまい、目立たない。
この（部分の）語り手は誰か？	・天皇は道隆と道兼には肝試しに行った証拠を要求していない。道隆と道兼のことは見ていない。

第5時 学習活動の実際

時間	学習者の動き	授業者の動き
8分	1 前時の学習を振り返り、本時の学習内容をつかむ。	・前時の発問内容の振り返りを行う。 ・本文を示しながら学習者の作品分析シートを紹介する。 ・作品分析の内容「分析の観点」を示す。
8分	2 肝だめし③本文を音読する。 一斉→ペア読み	【指示】主語が変わるところに印を付けながら、全員で音読する。 【指示】ペアで音読をする。主語が変わったら読み手を交代する。 主語が変わったかどうか迷うところは、その都度話し合う。
24分	3 本文を読み、物語の概要を把握する。 個人→ペア→全体	【発問】Q1 何が「便なきこと」なのか？ Q1に答えることで理解させたい項目 ア 古文単語「便なし」 イ 敬語「奏す」 【発問】Q2 「さる御気色」とは何か？ Q2に答えることで理解させたい項目 ア 古文単語「さり」「気色」「つゆ～打消」 イ 指示語「さる御気色」が示すもの ウ 敬語「承る」「せ/たまふ」 エ 接尾語「ばら」→「殿ばら」とは誰か。 オ 単語の類推の仕方「益なし」 【補助発問】「益」を使った熟語から「益」の意味を類推する。

		<p>【発問】Q3 なぜ「証なきこと」なのか？</p> <p>Q3 に答えることで理解させたい項目</p> <p>ア 前後の主語の把握</p> <p>イ 単語の類推の仕方「証なし」【発問】「証」を使った熟語から「証なし」の意味を類推する。</p> <p>ウ 直前の道長の発言内容の把握【追加指示】「証なきこと」～おはそうじぬ。は誰が何をしたか、ペアで説明する。</p>
10分	4 作品分析シートに「道長を目立たせる工夫」を記述する。	作品分析の観点をスクリーンに示し、考える際のヒントとしてもよいことを伝える。

3 時間目（第5時）肝だめし③作品分析シートの記述内容

【内容】

道長を除く人々（よその君達や道隆、道兼）は様子が急変しているが、道長は動じない。／道長は、帝に仰せごとをお願いしている。天皇にまでも進んで発言をしようとする道長の強気な態度がわかる。／花山天皇は道長からの仰せごとの依頼を拒否していない。道長は天皇までも納得させている。／道長が行くと言ったから兄たちも参加せざるを得ない状況になった。兄たちの行動のきっかけが道長となっている。／道長は、肝試しに「一人で行く」と宣言しており、より困難な状況を自ら作り出している。／道長は、花山天皇に「(本当に大極殿まで行ったか) 証拠がない」と言われ、すぐにその対応を考えることができています。／天皇は道隆と道兼には肝試しに行った証拠を要求していない。道隆と道兼のことは見ていない。

【表現／構成】

道長と帝の発言で物語が進んでいるので、二人がやりとりをするシーンのように見え、他の人物の出る隙がない。／道兼と道隆は発言もなく単独でも出ていない（「殿ばら」「二ところ」と二人セットで表記されるにとどまる）ので、道長以外の「人々」に含まれてしまい、目立たない。／道兼と道隆は表情の変化しか語られず、何も言うことができない兄と自信満々に語る道長という構図ができています。／「承せたまへる殿ばらは、御気色変はりて」の後に、「入道殿はつゆさる気色もなくて」とあり、道長は兄たちとは完全に違うことが示されている。すぐに表情が変わる兄と、変化を見せない道長との比較。／道隆と道兼が出てくる描写はほとんどが道長の言動の前後にあり、比較の対象とされている。道長が何か行動を起こす時は、比較される人物（兄や他の人々）がその前に出てくる。／天皇に「証拠がない」と言われた道長は「げに」としか語っていない。すぐに状況を飲み込める頭の回転の速さがある。／道兼道隆の出ていく様子が「苦む苦む」と表現されていて、道長の出で行き方との差が出ている。

このように、肝だめし③では、学習者は道長の周辺人物の行動・発言・描写があることで道長がより際立つということに言及できる者が増えた。

5. 3 読みの視点の拡充—第6時・第7時について—

第6時～第7時においては、形容詞や副詞など表現の細部まで目を向けられる学習者が増えた。質の違う人物を置くことが表現上の効果なのではなく、道長の前に道隆、道兼を描写することが工夫であるという「語りの順序」に気づく者も出てきた。また、情景描写や語り手自身の言葉など、肝だめしとは一見無関係であるような事柄についても、意味づけができるようになった。また、「道隆や道兼はその名前すら出てこない」といった情報の有無も書き手の工夫であるとも言及できた者が多数いた。「道長を目立たせる工夫」を見つけるためには、道長以外の語られ方を読むことでもあるということや、恐怖心を煽る構成や花山天皇の役割への気づきも見られた。さらには、道長の描写がほぼなかった第6時においては、「語られないことでわかる道長のすごさ」に気づく者がいた。また、第7時には、物語全体を俯瞰的に読み、道長の行動の前には道兼と道隆に負のイメージを持たせる内容が配置されているといった全体の構成への着目ができる者もいた。「道長を目立たせる工夫を見つける」ことを通して、「なぜこの表現がここにあるのか?」「もしこれが別の表現の仕方だったらどうなるか?」と自分で問いを立て、解釈していく読み、すなわちテキストと対話する読みに迫ることができた。

4 時間目 (第6時) 肝だめし④作品分析シートの記述内容

【内容】

夜中の1時であり、より恐怖を感じる。それでも道長は目的を果たしている。／花山天皇により、道隆と道長は道順が指定されている。肝試しへの恐怖がより強くなる。／道隆と道長の歩く距離は同じくらいであるにも関わらず、成功する者と失敗する者という立場の違いができてしまった。／道長は肝試しに成功したが、道兼と道隆は恐怖で引き返してしまった。／道隆と道兼は幻覚や幻聴とも言える現象を理由に目的地にたどり着くこともできず、肝試しを断念している。二人の恐怖心の強さがより強調される。／道隆と道兼は「身のさぶらはばこそ～」と言い訳までして、情けなさがより伝わる。／道隆と道兼は、肝試しに行けず天皇にも笑われた。二人の肝試しの成功は始めから期待されていなかったとも読め、そうならなかった道長がより高評価となる。／道長は「さりげなく、こともあらずげにて」と、余裕の表情で帰ってきた。弱い部分は見せていない。

【表現／構成】

道隆と道兼は、これまで名前も出てこず単独描写もなかった。今回やっと出てきてなおかつ一人ずつ詳細に書かれていると思ったら情けない場面であり、道長との比較のために使われている。／道隆と道兼は肝試しの道中で恐怖を感じる描写があるが、道長については一切語られない。道長にも恐怖はあったかもしれないが、それは読み手にはわからないようになっている。／「念じて」「わななくわななく」と、道隆と道兼が怖がっている様子が具体的に書かれている。「わななく」が二回繰り返されていることで、より恐怖心が伝わる。／道隆と道兼は並列して書かれており、道長以外の者という役割でしかない。／先に道隆と道兼の失敗を書くことで、道長の勇敢さがより伝わる。また、読み手は道隆・道兼の描写を読むことで、道長は肝試しに成功したと想像できるようになっている。／花山天皇は、道隆と道兼を見て大笑いしたとあり、二人は天皇に笑われる存在として描かれている。／道長は「いと久しく見えさせたまはぬ」とあるだけだが、これまでの流れから、読み手は道長が肝試しに行ってきたとわかるようになっている。

5 時間目（第7時）肝だめし⑤作品分析シートの記述内容

【内容】

道長は、肝試しに行った証拠として柱を削るという誰も予想できない大胆な行動を取った。／ただの柱ではなく高御座の柱を削ることは、とても強気な行動である。／道隆と道兼は、顔色が悪くなっているので、道長に圧倒されていることがわかる。／道長は帝にほめられ、驚かされている。／末の世にも道長の行動が伝えられている。

【表現／構成】

道長が証拠を出す時は「つれなし」と書かれており、柱を削ることをたいしたことではないと思われているような冷静な様子がわかる。／肝試しに行く前に、刀を持っていくことの意味を明かさなにより、周囲を驚かせることに成功している。／帝が「こは何ぞ」と、削りくずをすぐ理解しないことから、他の人の発想にないことを実行したことがわかる。／天皇が削りくずを疑った後で本物だと証明できた、という順序で書かれているため、道長の行動への賞賛が読み取れる。／帝が道長をほめている時の焦点は道隆と道兼に向いており、言葉を発することができない様子が書かれているので、二人は道長にまったく及ばないことがわかる。／最後の場面は道隆と道兼は発言すらしていないため、より弱々しく書かれているとわかる。／他にもない「帝」が道長をほめていることから、道長の評価の高さがわかる。／削りくずが本物かどうか調べさせたあとの天皇の様子がないので、道長は天皇をも圧倒させたとわかる。／その他の人々が削りくずに対して何か言ったことが書かれていないので、周囲の人に文句を言わせない政治力があると思わせられる。／末の世にも削り跡が残っていると書かれており、道長の栄華がその後続いたことがわかる。／第一段落で、公任に何も言えない道隆、道兼の様子が書かれ、今回は道長に何も言えない姿が書かれている。道長の実力が、何でもできる公任に引けをとらないようになったことが示されている。／道隆と道兼の失敗経験の後で、道長の行動が書かれる構成になっているので、道長がより目立つようになっている。

6. おわりに

本実践は、『大鏡』が昨年度に学習した教材であり、『大鏡』＝「道長の栄華」という前提を学習者が持っていることを学習材の強みとし、書き手の工夫を問うことで、内容理解にとどまらない、テキストと主体的に関わる読者の育成を行うことができた。また、授業者が説明的文章学習における評価読みの観点を援用することで、学習者の読みの視点を拡充することができた。物語を含めた「情報」は、語られることだけでなく、「語られないこと」で伝わることもあるという気づきを持たせたことは、本実践の成果である。「テキストを評価する読み」とは、書いてあることと書かれていないことの差を学習者が自分の言葉で補い、意味づけていくことである。本実践では、学習者自身が「工夫となる書きぶりはどこか、そしてそれがなぜ工夫となるのか」という問いを立てて解釈することができた。

しかし、個々での読みを全体に共有する時間は十分でなく、個人の解釈の妥当性を問うことや、テキスト外の情報と関連づけること、作品全体から部分に迫ることなどはできなかった。筆者の工夫を問うことは批判的思考力を養うことであることを踏まえると、様々な角度からテキストに立ち返り、個々の解釈をさらに深めていくことが必要であったと思われる。併せて今後の課題としたい。

《資料》

ワークシート (第3時)

<p>【大鏡】肝だめし①</p> <p>三年 組 香氏名</p>	<p>本時の目標</p> <p>物語の言語部を読み、それぞれの人物の描かれ方を分析する。</p>	<p>四条の大納言のなく何事もすくれ、めでたくおはしますぞ、 大入道殿、「いかでか、かからむ。うちやましくもあるかな。 わが子どもの、影だに踏むべくもあらぬこそ、口惜しけれ。」 と申させたまひければ、中の関白殿、栗田殿などは、 げにさもとやおぼすらむと、恥づかしげなる御気色にて、 ものものとまはぬに、この入道殿は、いと若くおはします御身にて、 「影をば踏まで、面をやは踏まぬ。」とこそ仰せられけれ。 まことにこそはおはしますめ。内大臣殿さだに、 近くてえ見たてまつりたまはぬよ。 登場人物の発言内容・様子をまとめよう。</p>						
		<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 33%; text-align: center;">公任</td> <td style="width: 33%; text-align: center;">兼家</td> <td style="width: 33%; text-align: center;">道隆/道兼</td> </tr> <tr> <td style="width: 33%; text-align: center;">道隆</td> <td colspan="2"></td> </tr> </table>	公任	兼家	道隆/道兼	道隆		
公任	兼家	道隆/道兼						
道隆								
		<p>【大鏡】肝だめし①</p> <p>三年 組 香氏名</p>						

ワークシート (第4時 1 / 2)

<p>【大鏡】肝だめし②-1</p> <p>三年 組 香氏名</p>	<p>本時の目標</p> <p>物語の情景や人物の発言内容を読み、人物の描かれ方を分析する。</p>	<p>五月雨も過ぎて、いとおどろおどろしく、かきたれ雨の降る夜、 帝、さうぞうしとやおぼしめしけむ、殿上に出でさせおはし まして、遊びおはししけるに、人々物語申しなどしたまうて、 昔恐ろしかりけることどもなどに申しなりたまへるに、 「今宵こそいとむつかしげなる夜なめれ。かく人がちなるにだに、 気色おほゆ。まして、もの離れたる所など、いかならむ。さあらむ所 に、ひとり往なむや。」と仰せられけるに、 「えまからじ。」とのみ申したまひけるぞ、 入道殿は、「いづくなりとも、まかりなむ。」と申したまひければ、 さるにころおはします帝にて、「いと興あることなり。さらば行け。 道隆は豊楽院、道兼は仁寿殿の塗籠、道長は大極殿へ行け。」 と仰せられければ、</p>
------------------------------------	--	--

ワークシート (第4時2 / 2)

<p>【大鏡】肝だめし②-2</p> <p>三年 組 番氏名</p> <p>本時の目標 物語の情景や人物の発言内容を読み、人物の描かれ方を分析する。</p>	<p>ステップ1「物語の状況を読む」</p> <p>天候</p>	<p>誰が、何をしている。</p>	<p>ステップ2「人物の発言内容を読む」</p>	<p>「今宵こそいとむづかしげなる夜なめれ。かく人がちなるにだに、気色おぼゆ。まして、もの離れたる所など、いかならむ。なあらむ所に、ひとり往なむや。」と仰せられけるに、</p> <p>「えまからじ。」とのみ申したまひけるま。</p>	<p>入道殿は、「いづくなりとも、まかりなむ。」と申したまひければ、</p> <p>さるごとくおはします帝にて、</p> <p>「ら」と興あることなり。さうば行け。</p>	<p>道隆は豊楽院、道兼は仁壽殿の塗籠、</p> <p>道長は大極殿へ行け。」</p> <p>と仰せられければ、</p>	<p>地図</p>
--	----------------------------------	-------------------	--------------------------	--	--	--	-----------

ワークシート (第5時)

<p>【大鏡】肝だめし③</p> <p>三年 組 番氏名</p> <p>本時の目標 道長の周田の人々の様子を読み、作品を分析する。</p>	<p>花山院の発言</p> <p>入道殿は、「いづくなりとも、まかりなむ。」と申したまひければ、さるごとくおはします帝にて、「ら」と興あることなり。さうば行け。道隆は豊楽院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へ行け。」と仰せられければ、</p> <p>よその吾達は、</p>	<p>Q1 「いなまきこ江をも奏してけるかな。」と思ふ。</p>	<p>Q2</p>	<p>「私の従者をば具しさふらはじ。</p> <p>この陣の吉上まれ、滝口まれ、一人を『昭齋』まで送れ。」と仰せと賜へ。それより内には、一人入りはべらむ。」と申したまへば、</p> <p>★「証なきこと。」と仰せらむるに、</p>	<p>「けに。」とて、御手箱に置かせたまへる小刀申して、立ちたまひぬ。</p> <p>いまだ「とらうあ、苦む苦むおのおのちかはすつじぬ。</p> <p>★「証なきこと。」と仰せられたのはなぜか？</p>	<p>地図</p>
---	--	--------------------------------------	-----------	---	---	-----------

ワークシート（第6時）

<p>大鏡 肝だめし④</p>	<p>三年 組 香氏名</p>	<p>本時の目標</p> <p>兄弟たちの肝だめしの様子を読み、作品を分析する。</p>	<p>(4) 段八郎宛</p> <p>子四つと奏して、かく仰せられ請するほどに、丑にもなりにけむ。」「道隆は右衛門の陣より出でよ。道長は右衛門より出でよ。」「と、それをさへ分かつせ給へば、しかおはしあへるに、中ノ間白殿、陣まで念じておはしましたるに、妻の松原のほどに、そのものともなき声どもの聞こゆるに、術なく帰りましたよ。粟田殿は露臺の外まで、わななくわななくおはしたるに、仁壽殿の東面の御のほどに、軒と等しき人のあるやうに見えたまひければ、ものもおぼえて、「身のまぢらばこそ、仰せ言も承りぬめ。」「</p> <p>とて、おのおの立ち帰り参りたまへれば、御賜をたたくて笑はせたまひけり。入道殿は、いと久しく見えさせたまはぬを、「いかが。」とおぼしめすほどにて、さうとほひりげなく、いとにもあはずげにて、参らせたまへる。</p> <p>肝だめしの様子を読み取ろう。</p> <p>道隆 中ノ間白殿と道長 粟田殿 は、どのやうであつたか。</p>
<p>道隆 中ノ間白殿 〇「痛くて」「あつたのはなぜ？」</p>	<p>道長 粟田殿 〇「おのちの御はたてなしたるはなぜ？」</p>		

ワークシート（第7時）

<p>大鏡 肝だめし⑤</p>	<p>三年 組 香氏名</p>	<p>本時の目標</p> <p>物語全体を振り返り、作品を分析する。</p>	<p>「いかに、いかに。」と問はせたまへば、いとどやかに、御刃に割られたる物をとり真じて奉りせたまひけり。」「いは何ぞ。」「と仰せらるれば、「ただにて帰り参りてはへらむは、証まをさあまじきより、高御座の南面の柱のもとを削りてさくらちなり。」「と、つれなく申したまふに、いとあましくおぼしめさる。」「と殿たちの御気色はいかにもなほ直ちで、この殿のかくて参りたまへるぞ、帝よりはじめ感じのしられたまへど、うちやましきや、またいかなるか、ものも言はでせぞちひたまひける。なほ疑はてへまはしめなれば、ととめて、」藏人して、削りくつをさしおはせむか。」「と仰せたまひければ、持て行きて、押しつけて見たうひける。」「と御侍はさかりけり。その削り跡は、いとほみやかにてはべめり。末の世にも、見る人はなほあまじきにてて申ししか。」「</p> <p>〇 1 「御刃に割られたる物をとり真じて奉りせたまひけり」とあるが、誰が何のために行ったのか。</p> <p>〇 2 「削りくつをさしおはせむか。」とあるが、藏人は何の命令を受けていたのか。</p>
			<p>〇 1 「削りくつをさしおはせむか。」とあるが、藏人は何の命令を受けていたのか。</p>

注

- (1) 森田信義(1989)は「よくわかる(わからない)ところはどこか、またそれはなぜか」と学習者に問いかけ、筆者の工夫を評価することに向かわせている。
- (2) 河北騰(2008)の指摘する『大鏡』の執筆意図は以下の3点である。①「傑れた政治家で無類の幸い人藤原道長の、その栄華の生涯を賛美する点」②「かの六国史で中断したわが国の正史記述の、その欠を補う事も目的とされた点」③「年若い人達に、この様な古い歴史などを知らせたい」
- (3) 論者により「評価読み」「吟味読み」「批判的読み」「クリティカル・リーディング」等の語が用いられているが、本稿ではとくに区別しない。
- (4) 植山俊宏(2001)「説明文は、相手にその内容とその記述の際の筆者の思想(価値観)を説得する役目も持つとしている」
- (5) ただし、『大鏡』は河北騰(2008)にあるように虚構性の強さが指摘されている。このことから書かれていること=事実(史実)ではないということは学習者にも伝えてきた。
- (6) 森田信義(1989)「教材研究の観点」井上尚美(1998)「批判的な読みのチェックリスト」から示唆を得た。

〈引用・参考文献〉

- 井上尚美(1998)『思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理—』、明治図書、pp.77-78。
- 植山俊宏(2001)「129 説明・解説」大槻和夫編『国語科重要用語300の基礎知識』、明治図書、p.141。
- 植山俊宏(2002)「説明的文章の領域における実践研究の成果と展望」、全国大学国語学会編『国語科教育学研究の成果と展望』、明治図書、pp.277-268。
- 河北騰(2008)『大鏡全注釈』、明治書院。
- 森田信義(1984)『認識主体を育てる説明的文章の指導』、溪水社。
- 森田信義(1988)『説明的文章の研究と実践—達成水準の検討』、明治図書。
- 森田信義(1989)『筆者の工夫を評価する説明的文章の指導』、明治図書。
- 森田信義(2011)『「評価読み」による説明的文章の教育』、溪水社。

(かねこ もえ・岐阜県立長良高等学校)